小児科医療システムの利便性と
子育てをする母親の不安に関する調査

田上志保　溝口祥代　吉田真奈美　山下真由　藤井友紀　川上舞子

指導教員　中塚幹也

【緒言】

近年，一組の夫婦が持つ子どもの数が減少している。その要因としては，仕事と子育ての両立の負担が重いこと，妻の精神的，身体的負担の増大，夫の育児・家事の不参加などが挙げられている。これに加えて，最近は小児科医療システムの崩壊も叫ばれており，ますます，子育てを困難なものにしている。そこで今回，私達は，小児科医療体制と母親の持つ不安に関する調査を行った。

【方法】

2007 年 9～11 月に，岡山県倉敷市，新見市，備前市，真庭市，美作市の乳幼児健診に来所した児の母親 631 人に同意のもと，無記名の自己記入式調査票を配布し，回収箱に投函する形で回収した。561 人より回答を得，回収率は 88.9%であった。対象者の平均年齢は 31.4±4.89(mean±S.D.)[19～45]歳であった。

統計学的解析は欠損値を除いて χ^2 検定を行い，$p<0.05$ を有意とした。尚，本研究は，岡山大学医学部保健学科倫理委員会の承認のもと施行した。

【結果】

1.対象の背景

家族形態は核家族が 350 人(62.4%)，拡大家族が 182 人(32.5%)であり，母子家庭が 28 人(5.0%)であった。現在の子どもの数は 2.02±0.83(mean±S.D.)人であった。主婦が 55.7%(269 人/531 人)，正規社員・公務員が 22.2%(118 人/531 人)，パート・アルバイトが 15.1%(8 人/531 人)，自営業が 4.14%(21 人/531 人)であった。

2.かかりつけ小児科受診までの時間と不安

小児科受診までの時間は片道 17.7±22.6 分であった。「20 分未満」が 61.8%，「20 分以上 40 分未満」が 27.8%，「40 分以上 60 分未満」が 16.6%，「60 分以上」が 2.27%であった。

小児科受診までの時間が長くなるほど，小児科医療に「不安あり」の割合は増加した。不安の内訳では「受診までかかる時間と距離」，「交通手段」の割合が高かった。また，居住地域の小児科医療体制に対して，「やや不満」，「かなり不満」と答えた者の割合は高くなっていた。特に，「60 分以上」かかる群では 100%が不満と回答していた。

3.居住地域別の小児科医療体制に対する不安

新見市，美作市では，小児科医療体制に関して「不安あり」の割合が 7 割を超え，倉敷市，真庭市でも 6 割を超えていた。不安の内訳として「夜間・休日の救急がない」など居住地の小児科医療体制に関するものと「兄弟の託児」，「小児科に連れて行ってくれる人がいない」など，母親が受診行動をとる際の協力体制，地域サービスに関するものとで地域差がみられた。「夜間・休日の救急がない」と回答した者の割合が新見市では 59.2%，真庭市では 44.7%，倉敷市では 46.4%と高かった。また，「きょうだいの託児」と回答した者の比率では美作市が，「小児科に連れて行ってくれる人がいない」と回答した者の比率では倉敷市が，他の地域よりも有意に高かった。

小児科医療体制の満足度においては，「やや不満足」，「かなり不満足」の合計が，新見市，美作市では 7 割を超え，真庭市では半数を超えていた 。

【考察】

小児科医療体制を不満足と感じている地域では，小児科受診時の不安を持つ母親の比率が高くなっていた。しかし，小児科までの送迎やきょうだいの託児など，小児科受診時に協力が得られている地域においては，不安を持つ母親の比率が少なくなっていた。家族や近所でのこのような支援が受けられない家庭に関しては，小児科医療体制への不安が低下するよう種々の社会的支援が必要である。

【結論】

小児科医療体制の満足度を向上させる要因として，小児科医療体制の整備があるが，一方では母親の受診行動を支える地域社会のサポート体制の充実も重要である。